



# 守山市 発達支援センターだより

令和7年度 3月号



令和8年3月11日発行  
守山市発達支援センター（発達支援課）  
守山市下之郷3丁目2番5号 すこやかセンター内  
Tel: 077-582-1158 Fax: 077-581-1628

年度末にさしかかり、気候も春らしくなってまいりました。どの現場でも多忙を極める時期になりますので、皆さま体調にお気をつけください。さて、今号の発達支援センターだよりでは、個別支援計画や引き継ぎにまつわるコラムをお届けします。

## 進学・進級・就職など…変化の多いこの時期にまわりの大人が意識したいこと

進級や就学・就職といった新しいステージでの生活をスタートさせるタイミングには、希望や期待をもつ一方、環境や人間関係などの大きな変化に不安や心配を感じやすくなります。時には、自分の思いを素直に表出できなくなるなど、生活に大きな影響を与えることもあります。子ども達がこれまでに育んできた力を十分に発揮するためには、子ども本人にとって必要な支援や支援に役立つ情報を、「個別支援計画」を用いながら支援者間で確実に引き継ぐことが非常に重要です。

ここでは、どのステージでも共通する「個別支援計画」で押さえておきたいポイントをお伝えします。

### 1. 個別支援計画づくりの際に押さえておきたいポイント

全ステージ  
共通

自分たちの支援を見返し、さらに有効な支援を検討するのに役立ち、引き継ぎの時期には引き継ぎ先が子どもの姿を事前に思い浮かべられることで、新しい環境への移行を支えます。

#### 1 子どもの特性

得意・苦手・好きなこと、  
感覚過敏、行動の特徴

#### 2 具体的な支援の方法

誰が・どこで・どういう時に・どういう方法で接すると効果的か、クールダウンの方法、物や座席の配置 など

#### 3 他機関との連携状況

医療機関などとの共有内容（診断名や服薬の有無、利用しているサービスなど）

### 2. 園から小学校等へ就学する子ども達が安心して生活するために

就学前  
向け

「個別支援計画」の中では記載しきれないけれど大切な情報として下記のようなことが挙げられます。

#### 1 日々の生活の中での関わり、生活面での配慮

排泄や食事、医療的ケア等の対応の仕方、視覚支援の内容（実物もしくは写真やイラスト）、声の掛け方（声量・声音）など

#### 2 家庭との連携のポイント

保護者の思い、子どもの特性理解について、有効な連携方法など

#### ❖ 必要な情報が共有されることで…

職員が本人や保護者と  
信頼関係を築きやすくなる

本人や保護者が安心感をもって  
新生活をスタートできる

関係者間の連携強化ができて  
本人や保護者が多方面から支援を  
受けられる

### 3. 義務教育期間を終え、進学・就職等する子ども達が安心して生活するために

#### 学齢期 向け

#### ❖ 青年期における子ども達の自立を支える大人の関わり

“自立”にはさまざまな側面や定義がありますが、ここでは「自分のことを自分で考え、選び、行動できる力」「自分で考えて判断し、必要な時には他者に助けを求める力」をもつこととし、発達段階を踏まえて、本人に期待する姿と、それを支える大人の関わりのポイントについて説明します。なお、青年期とは主に10代半ばから20代前半を指しますが、発達の道筋には個人差がありますので、子どもひとりひとりの発達段階に合わせた関わりが望まれます。

	この時期の特徴	本人に期待する姿	まわりで支える大人の関わり方のポイント
青年期 前期	思春期に入り、周り自分との違いに気づくと共に、理想と現実との違いに悩む	自己を見つめ、自分らしい生き方を考え始める	・苦手なことやできないことについてばかり話すのではなく、普段のやりとりの中で本人の得意や関心のあることを積極的に話題に取り上げ、成長した部分を認め励ます。
青年期 中期	思春期の混乱からは徐々に脱しつつも、自分がどのように生きていくか模索を始める	自分らしい生き方について、主体的に決定していく	・これから先、どのように生活を送りたいのかを具体的にイメージし、そのためにどういった情報を集める必要があるのか、見通しをもって本人と話し合う。あらかじめできそうなことを、少しずつ、大人と一緒に試していく。
青年期 後期	“自分とは何か”といった問いを持ちながら、自分なりの一貫した自己像を確立する	人との信頼関係を築く 自分自身を知る 社会的なふるまいができるようになる	・自己管理が難しい部分について、本人の努力でできることと、サポートを受けてできることに整理する。 ・困った時に孤立してしまうことのないよう関係者や親などが定期的に声かけし、少しずつ一人でできることを増やしていく。

#### ❖ 子ども自身が自分のことを考えられるようになってきたら…(引き継ぎのポイント)

自分の得手・不得手を少しずつ理解し、自分に必要な支援を検討できる時期(個人差はありますが、ここでは中学卒業～高校生世代くらいだと想定します)になってきたら、個別支援計画の引き継ぎ前に子ども本人と一緒に下記のような内容を話してみるのもよいかもしれません。

- 支援を受けてできるようになったことを確認する
- 進学後(就職後)に予想される困りごとを具体的に考える

例) 大学等なら…時間割の組み方や履修登録、  
毎時間教室が変わる、突然の休講、  
授業によって課題の提出方法が違う

就職等なら…複数の業務を任される(業務の優先順位のつけ方等)、電話対応、人と一緒に取り組む業務

- 上記のような困りごとが出てきた時に、誰にどのように相談するとよいかをなるべく具体的に考える  
(必要に応じて、本人や保護者が相談しやすい機関を見つけておき、いざという時に利用できる場として紹介する)

“困ったことを相談できる力”は  
自立の要になります。

そのためには「まわりに相談すれば  
なんとかなった(うまくいった)」経験を  
たくさん積みたいものです。



#### 【参考文献・資料等】

- ・滋賀県教育委員会 HP より「学びをつなぐ幼保小架け橋ガイドブック『架け橋期のカリキュラムを作成しよう!』」
- ・文部科学省 HP より「子どもの徳育に関する懇談会『審議の概要』」
- ・令和7年度 高等学校特別支援教育コーディネーター研修[第1回]資料「特別支援教育支援体制と関係機関との連携」より